



浮 浮

在

世

風

床 呂

全 全

昭和十年九月十日印刷
昭和十年九月十四日發行

有朋堂文庫

浮世風呂、浮世床

(非賣品)

東京市淀橋區西大久保町二丁目二百三十六番地

編輯者

塚本哲三

東京市神田區錦町一丁目七番地ノ一

株式會社有朋堂

代表者

印刷者兼
發行者

三浦正

東京市神田區錦町三丁目廿二番地ノ二

印刷所

合資會社有朋印刷社

東京市神田區錦町一丁目七番地ノ一

發行所

株式會社有朋堂

不許複製

緒言

江戸小説史中の文化時代は、蓋し讀本と滑稽本との時代なり。讀本の事は今姑く措く。我が滑稽作者の兩大關を以て許されたる一九三馬の二家が、油の乗りたる諸作を續出したるは、實に此時代にあり。二家共に、此間に於て述作する所各十數部。其中特に傑作として推すべきは、一九にありては東海道中膝栗毛、三馬にありては浮世床浮世風呂にして、是やがて江戸文學中に於ける滑稽物の白眉なること、世既に定論あり。

東海道中膝栗毛の流行の非常なりしは、今も「彌次喜多」の名の殆ど通用せざる所なきにても知らるべく、浮世風呂浮世床の當時に喧傳せられたる事は、あれ程に三馬嫌ひなる「物之本江戸作者部類」の作者をして、

只浮世爐のみ當年評判第一なりき。されば四篇まで相續せしを看官飽ずとて、又浮世床前後二篇を出したり。

と言はせたるにも知らるべし。

さて「作者部類」の記者更に記して曰く、

きはれ、皆膝栗毛の二の町にて、等類を脱れがたかり。

と。是はちと酷評なるべし。成程浮世風呂は膝栗毛に後れて出で、随つて此が彼に負ふ所あるは勿論の事なれども、大體の趣向より言ふも、材料の取り方より見るも、此と彼と大に其の面目を異にせるは、二書を併讀せるものゝ誰も認めざるを得ざる所なるべし。加之、滑稽は等しく滑稽なれども、一九の滑稽は砂糖の唯甘きが如く、時に其の品質の下等にして黒砂糖に

近きに避易せしむる事無きにあられども、要するに純乎たる滑稽なり。三馬の滑稽に至りては之に異なり。甘味の中に苦味あり。滋味あり、饅頭の餡の裏に丸薬の混り居れる事珍しからず。亦以て二家の面目の相違を觀るべし。

三馬は單に文筆の人にあらず。否。戯作は彼が副業たりしならん。其の本町に開ける賣藥化粧品店は中々の繁昌にて、店より發賣せる白粉下、江戸の水の賣行頗る景氣よかりしかば、彼は五十に足らずして歿せしにも拘はらず、身後に相應の産を遺したりといふ。蓋し本書にも見ゆる如く、自著の小説中の人物をして、自店の賣品の廣告係を勤めしむる類の、機敏なる彼の遣口が頗る其の物質的の成功を助けしなるべし。之を一九の、或は書

肆の食客となり、或は大名の妾たる娘の仕送りに懸りて、棒鯨的生涯を送りしに比するは、是豈興味ある對照にあらずや。讀者此の二家の相違を記憶して二家の作に臨まば、文字以外、或は更に一種の興味を感ずる所あらん歟。本書を翻刻するに當りては、關根博士所藏の原本に據りて嚴密なる校訂を加へ、挿畫をも残らず其儘に保存し、尙通讀の便をはかりて對話を別行とし、村松操氏を煩はして難解の語句に頭註を加へたり。

大正二年九月

校訂者 武 笠 三

目録

譚話浮世風呂

前編 卷之上（男湯之卷）……………一—四

浮世風呂大意

朝湯の光景

晝時の光景

前編 卷之下……………五〇—一〇三

午後の光景

二編 卷之上（女中湯之卷）……………一〇三—一五三

女湯之卷自序

朝湯より晝前の光景

二編 卷之下……………一五三—一九四

午後の光景

三編 卷之上……………一九五—二四一

三編自序

女中湯之遺漏

三編 卷之下……………二四二—二八八

女中湯之遺漏

ぐつと捻て俗物なる跋

四編 卷之上（男湯再編）……………二八九—三三六

四編自序

秋の時候

四編 卷之中……………三三七—三六八

四編 卷之下……………三六九—四〇四

跋

柳髮新話浮世床

初編 卷之上 四〇五——四六五

柳髮新話自序

初編 卷之中 四六六——四九五

初編 卷之下 四九六——五三〇

浮世床後叙

二編 卷之上 五三——五六八

序

二編 卷之下 五六九——六二四

浮世風呂
浮世床
内容梗概

藝者同志の内輪話	一—三
よい／＼ぶた七の片言	一五—二〇
行商人の呼聲	二三—二四
父親と小供とお月様いくつの唄	二四—三〇
籤醫者の隔症の説明	三二—三三
松兵衛の儉約説	三四—三七
三助田舎言葉にて、薯蕷鰻となりし話、田舎三助の物語	三八—四〇
男湯の中の雑話	四〇—四七
禪を手拭と誤る、田舎侍の失敗	四七—四九
小供等の雑話	五〇—五五
生酔廣告を誤讀して番頭を惱ます	五五—六三
生酔二階番を惱ます	六四—六八
若者の將基さし	七〇—七六
母親の異見	七九—八〇
座頭の仙臺淨瑠璃	八二—八三
盲人の鉢合せ	八四—八五

生酔の悪戯、座頭の立腹	八五—九〇
生酔と座頭の問答	九〇—九三
生酔といさみの喧嘩	九三—九八
義太夫の師匠と弟子	五九—一〇二
藝者のお客話	一一〇—一二六
母親にお辨當をせがむ小娘—寺小屋の風習	一二七—一二八
流行の今昔、母親同志の話	一二九—一二〇
産前産後の話し	一二一—一二三
老婆同志の嫁息子の噂	一二五—一二三
母親同志の娘自慢及びお屋敷奉公の話	一三三—一三五
江戸女と上方女、方言の争	一三八—一三九
關東べいと上方ぜへろく	一三九—一四〇
小娘のお隣りごっこ	一四四—一四七
小娘の毬唄(一、二、三。大門口。御白	一四七—一四九
白。京々京橋)	一四九—一五〇
夫婦喧嘩の物語	一五四—一五七
小娘の事より女房と老婆との口論姑	一五九—一六二
をいたはる嫁	一六三—一六五

忠臣藏の力彌、お経等に對する女房

一六七—一七二

の批評

老婆の泣言

一七三—一七七

主人を誘ふ下女

一七八—一八二

乳母と子守の口喧嘩

一八三—一八八

鼻痛女、流行の衣服、簪の噂

一八九—一九二

高慢女のめでた盡しの話

一九三—一九四

藝者同士の拳の話

二〇三—二〇七

藝者の客の噂

二〇九—二二〇

妾の日那の噂

二二二—二二四

小娘羽根と毬との優劣論

二二五—二二六

小娘等銘々の母親の噂

二二七—二二九

娘の噂と化粧の話、母親同志の物語

二三〇—二三三

奉公人の噂、主婦同志の物語

二三三—二三七

衣服と小間物の、話下女同志の物語

二二九—二三〇

銘々の主人を罵る下女

二三二—二三三

いさみ女の啖呵

二三五—二三八

番頭の狂歌

二三八—二四二

母親と小兒の話

二四五—二五二

山出し下女の甚九

二五三—二五五

女同志の隣家夫婦の噂

二五六—二五九

女同志の流行物の話

二六〇—二六三

氣位高き女國學者

二六五—二六八

息子の愚痴をこぼす母親

二六九—二七二

娘同志のお屋敷奉公の話

二七三—二七九

娘同志の琴のおさらひの相談

二八〇—二八二

義太夫語りの女房の上方訛

二八二—二八六

江戸の盆踊(小娘の有様)

二九七—三〇一

むだ助、甘次小供の駄方を談ず

三〇三—三〇五

仲よき夫婦の噂

三〇五—三〇六

鐵炮作の謠話

三〇八—三二三

とび八の謠話

三二五—三二九

再び鐵炮作の謠話

三三〇—三三二

金銀を信心すれば物持になるといふ話

三七七—三三〇

其角の句のもじり宗匠を惱ます

三三二—三三六

押籠隠居の若旦那太鼓持と昔を語る

三三七—三四五

獨り者の不自由談、けち助の話

三四六—三四九

上方者の氣永八百屋を惱ます

三五二—三六八

よいくの七夕の話

三六九—三七三

はやり唄(上方唄)の好惡

「お」様澤山の世間話

いさみ啖呵を切る

小供の片言話

天明前後より文化文政頃迄の芝居の

變遷の噂

江戸と田舎の便不便

座頭の八人藝

俳諧師の話

舞茸に當りたる若九郎

浮世床附近の光景

道樂者の物語(女房の小言、友達への

義理)

世間知らずの學者先生

無學もの世間知らずの素讀先生を罵

る

今川狀の文句の取違

氷を破りて鯉を捕へし昔話の評

隠居の若い時の話

三七四——三七六

三七六——三七九

三八〇——三八二

三八五——三八七

三八八——三九三

三九三——三九五

三九五——三九六

三九七——三九九

三九九——四〇二

四一三——四一四

四一八——四二一

四二三——四二九

四三二——四三三

四三三——四三五

四三五——四三八

四四一——四四三

若い衆同志の雜談

菓子賣りと其呼聲

遊女の文を讀む三人の道樂息子

若者の噂

上方者の儉約話

江戸兒上方者をけなす

女郎買の失敗談、上方者の自白

女猫に名を附くる話

道樂息子を持てる親の愚痴

腕白丁稚の惡態

居候の論

居候の手前勝手論

老人の芝居狂言の話

乳母の主人夫婦の噂

若者三人髪結の前後を爭ふ

巫女の神おろしの有様

神おろしの文句

犬の口よせ

口よせを見物せる人々の話

口よせを頼める變助と其亡妻噂の話

四四四——四五八

四六〇——四六一

四六六——四七二

四七二——四七七

四七七——四七九

四七九——四八二

四八四——四八八

四八九——四九二

四九二——四九五

四九八——五〇二

五〇三——五〇五

五〇六——五〇九

五一七——五一九

五二〇——五二三

五二四——五二五

五三九——五四〇

五四〇——五四一

五四一——五四四

五四五——五四四

五四八——五五〇

内容梗概

讀本すきの男讀本の口調	五五〇	五五四
神隱しの口よせ	五五四	五六〇
氣取家の女房の噂	五六二	五六四
廊中の笑話	五六五	五六八
馬陰女を張りて溝に陥りし失敗談	五七二	五七六
娘に近づかんとする息子の話	五七六	五七七
戒名の長短及び其得失の説	五七七	五八一
八百屋の娘の追善の歌	五八一	五八一
鬢五郎の職業上の苦心談	五八五	五八七
髪結床の鉢裁の話	五八八	五八九
鳥屋ちやば助物真似	五八九	五九一
越後節の瞽女歌	五九三	五九六
ちやば八が三國志讀の失敗談	五九八	六〇二
吉原の文使	六〇四	六〇六
ちやば八拳に敗けて蕎麥を奢らさる	六〇六	六〇九
老婆の長話	六〇九	六二二

浮世風呂大意

熟^{つう}監^{かん}るに、錢湯^{せんたう}ほど捷徑^{ちやうきやう}の教諭^{をしへ}なるはなし。其故^{いかん}如何となれば、賢愚、邪正、貧福、貴賤、湯を浴^{あび}んとて裸形^{はだか}になるは、天地自然の道理、釋迦も孔子も於^お三も權助^{こんすけ}も産^{うま}れたまよの容^{すがた}にて、惜^{をし}い欲^{ほし}いも西の海、さらりと無欲の形なり。欲垢^{よくあか}と梵惱^{ぼんなん}と、洗^{あら}清^{きよ}めて淨湯^{をかう}を浴^{あび}れば、旦那さまも折助も、孰^{され}が孰^{され}やら一般裸體^{おなじはだかみ}。是乃ち生れた時の産湯^{うゆ}から死^しんだ時の葬灌^{もくわん}にて、暮^{ゆふ}に紅顔の醉客^{なまこひ}も、朝湯に醒^{しらふ}的となるが如く、生死一重^{しやうじひ}が嗚呼^{あゐ}まよならぬ哉^{かな}。されば佛嫌^{ほとけきらひ}の老人^{としより}も、風呂へ入れば吾^{われ}しらず念佛をまうし、色好^{いろこのみ}の壯夫^{わかいもの}も、裸になれば前をおさへて己^{おのれ}から恥^{はにか}を知り、猛^{たけ}き武士^{もののふ}の頸^{あた}から湯をかけられても、人込^{ひごころ}ぢやと堪忍をまもり、目に見えぬ鬼神^{おにがみ}を隻腕^{かたうで}に雕^{きり}たる俠客^{ちやうつはら}も、御免なさいと石榴口^{ざくろぐち}に屈^かむは、錢湯の徳ならずや。心ある人に私^{わたくし}あれども、心なき湯に私なし。譬^{たと}へば、人密^{ひそ}

に湯の中なかにて撒屁おならをすれば、湯はぶくくなと鳴りて、忽ち泡を浮うかみ出いす。嘗聞かつてき、藪の中
 の矢二郎はしらず、湯の中の人として、湯のおもはくをも恥はざらめや。搥すて錢湯に五
 常の道あり。湯を以て身を溫め、垢を落おし病を治し、草臥くたびを休むるたぐひ則すなはち仁じんなり。桶
 のお明あきはござりませぬかと、他ひとの桶に手をかけず、留桶とめをきを我儘につかはず、又は急いそで
 明あきて貸すたぐひ則すなはち義也。田舎者ゐなかもでござい、冷物ひんものでござい、御免なさいといひ、或あるひはお早
 い、お先へと演のべ、或はお靜に、お寛ゆるりなどいふたぐひ則すなはち禮なり。糠、洗粉、輕石、絲瓜皮へちまのかはに
 て垢を落おし、石子いしころで毛を切るたぐひ則すなはち智也。あつといへば水をうめぬるいといへ
 ば湯をうめる、お互に背後せなかをながしあふたぐひ則すなはち信也。かゝるめでたき錢湯なれば、
 此こゝに浴する人々も、水舟みづふねの升ます、陸湯りくゆの桶、方圓の器うつはに隨ふ道理を悟りて、湯屋の流し板いた
 のごとく、己おのが心を常に磨ときて、諸もろの垢をたけな。人間一生五十年、二度入さの御方おんかたある
 とも、御一人前ごいちにんまえの分別あるは湯屋の張札の如く、一心足らぬ萬能膏あり。馬鹿に附つる

藥はあらずも、走馬の千里膏、鞭打て呉れる交の無二膏あり。口中散を翻せば、忠孝一切の妙藥、二親の安神散、兎角梵惱の火の用心は、湯屋の定書に似たり。心に驕奢の風立てば、家私は何時にても早仕舞也。五倫五體は天地より預物なれば、大切の品を御持參物なるを、色と酒とに魂の失物不存、我から招く禍は、他人の一切存不中事ならずや。名聞利欲の喧嘩口論、喜怒哀樂の高聲御無用。此文言をまもらぬ時は、仕舞湯に入損ひ、モウ拔ましたといはれて、後悔手巾を咬むとも益なし。なべて世の中の人心は、錢湯の虱に等しく、善惡に移り易き物なれば、權兵衛が褰褸から、八兵衛が羽二重に移り、田婢の湯具から、令室の絹布へも移る。きのふの襦袢一枚は疊の上へ脱しも、けふの重著は棚の上へ脱に等しく、高貴貧賤は天にあり、善惡邪正は己が招く所也。此意味をとくと悟らば、他の異見は朝湯の如く、己が身に染みわたるべし。唯一生の用心は、軀を借切の戸棚へ納め、魂に錠をおろして、六情を履違へぬやうに、堅く相守

可^{うすへ}申^{まう}事^{こと}と、神^{くみ}儒^{あひ}佛^{ぎやうじ}の組^{くみ}合^あ行^{ぎやう}事^じが牡^ぼ丹^た餅^{もち}ほどの判^{はん}を居^{すま}てしかいふ。
維^{これ}時^{とき}文^{ぶん}化^か六^{ろく}年^{ねん}、巳^みの春^{はる}の發^{うり}市^{いち}にせばやと、辰^{たつ}の重^{ちやう}九^{きう}に毫^{みで}を起^{おこ}して例^{れい}の急^{きふ}案^{あん}、后^{のち}の觀^つ月^{きみ}
の芋^{いも}を食^くつて、屁^へのごとき小^{せう}冊^{さく}成^{なり}る。

石町^{いしまち}の寓^う居^きに於^おいて

式^{しき}亭^{てい}三^{さん}馬^ば戲^ぎ題^{だい}